

四誓偈の名称と読み方について

坪井俊映

無量壽經上卷四十八願の説述に続いて、「我建超世願云々」なる五字十一行に亘る法藏比丘の誓願を記述する偈頌がある。普通淨土宗にて四誓偈または重誓偈と呼び眞宗にては三誓偈と称している。三誓偈というのは偈頌の初めに「誓不取正覺」なる句が三度ある処より名づけた名称である。淨土宗にて四誓偈というのは偈頌の終りに「斷續苦剋果」以下の兩聲の文を一誓に数えて四誓というのである。然し偈頌の当相を見る限り、先きの三誓のごとき力強い誓願の告白を見ることが出来ず、世自在王如来及び諸天に誓願の剋果による發明を請う文と見た方が妥当な破である。異訳經たる無量壽莊嚴經、無量壽如来会、轉文藏文ともに請證の文と見られる。また最古の無量壽經釈書といわれる淨影寺慧遠の無量壽經義疏上（淨全五・二八頁）には「初四約三前願一立誓自要於中台有十一偈文前之十偈立誓自要後一請證」と述べて最後の一偈は證を請う文として、立誓の偈とは見ていない。この説に對して、吉藏の無量壽義疏（淨全五・六六頁）には、「次小長行及五言偈、二明説誓要願於三十一行偈中、自有三階一明義初有五行正誓次七行誓後更願餘一行説誓要端」といつて、終りの一偈も要端を誓う文として立誓に数えている。

本宗にてこの偈を「四誓」と呼ぶ初めは鎌西の西宗要（淨全一〇・二二九頁）であつて、「四誓偈の名称と読み方について」（坪井）

四菩薩の名林と説き方について（坪井）

問雙卷經中有「我建超世願等五言十一行偈」見。問者是説「何事」可レム乎。答明「四誓」也。鞋云三誓在「經文」分明也。全不レ見「四誓」如何。答「末後此願若剋果之文取」四誓之也。しといふ、今の文は願であるけれども意は誓であり。四十八願成就すれば大地震動して天人華を雨降らすべしと誓う文であるから誓の意であると説いている。これは上記の吉藏の考えと同じであるが、宗祖も三都經大意（法然上人全集昭和本文二九頁）に「虚空ノ諸天マサニ珍妙ノ花ヲ雨フラスベント誓ヒ給ヒシカハ大地大種ニ振動シヌ」と説いて、これを一誓に数えている。

宗祖及び鎮西が吉藏の義疏によられたか否かは今早速に決定することが出来ないが、大体淨土界の無量壽經の分科は慈遠の無量壽經義疏のそれによっているのであるから、慈遠の釈義に準すべきであるに、この最後の一偈のみを「清證」とせず「立誓」と見ると二に宗祖並に鎮西の特殊な考え方が存する。

次にこの偈頌の読み方訓読は、幕末増上寺に勸學講院を興した大雲が嘉永五年に刊行した三都經の清法訓読によつて読むを普通としている、そのうち「神力廣大衆」以下「得爲三界雄」までの文を訓ずるに仏徳を讃歎する文として訓読をほどこしている。その終りの文を出せば、即ち「諸の惡道を閑塞して台趣の門に通達せしめ功祚満足することを成じて、威曜十方に朗なり。日月重輝を散め。天衆も隠れて現せず。衆のために法藏を開きて、廣く功徳の宝を施し。常に大衆の中にあいて説法。師子吼したまふ。一切の仏を供養し。衆の根本を具足し。願惠のごとく成就して。三界の雄となることを得たまえり。仏の無礙智のごときは通達して照したまわす」といふことなしと訓ずる。

この文のうち横に〇字を付したごとく訓読するとき、法藏比丘が世自在王如来の仏徳を讃

較することになつて、誓願の意味が現われていない。この横マルを付した偈文を異訳の經と比較すると、無量壽如来會は「大教の中に於て師子吼せん」。「本願天人尊を満足し如来の知見得る所なく一切の有為皆なよく了せん」とあり、無量壽莊嚴經には「願くは我如来世に常に天人師となつて百億世界の中に而も師子吼を作し……」。「昔の所願を円満し一切皆成ふせん」とあつて、全て誓願の意を顯わして、仏徳を讃歎することにはなつていない。梵文藏文も同様であつて、偽續全体が法藏比丘の誓願告白の形をなしている。

而るに大聖賢に隨うかざりこの偈文が誓願と仏徳讃歎の二段に解さる。この大聖の訓示は了慧の無量壽經鈔の訓示解義によつたものと思われるが、しかし了慧の無量壽經鈔は慧遠の義疏の分科釈義を参考として著わしたものである。今慧遠の無量壽經義疏を見ると、「於レ中台有ニ十一偈文一前之十偈立レ誓自專一後一請レ證」とあつて總じて四誓偈は十一偈ある中、前の十偈は「立誓」であり、後の一偈は「請證」であること分釈しながら、細釈に至つて、餘六偈へ神力演大光——等此最勝尊——廣於レ中初有ニ五偈半文一廣舉ニ仏徳——末後半偈へ願我功徳力等此最勝尊——免願求レ同」と釈して、神力演大光以下は仏徳を挙げて讃ずることと釈する。仏徳とはこゝでは世自在王如来のことと考えられるから、四誓十一偈文のうち、初めの四誓が誓願求願を示し、次の五偈半が仏徳を讃ずる偈であり、次の半偈が免願、末後の一偈が請證ということになる。すると慧遠がこの偈を釈する始めに「前之十偈立。誓自專」と分釈しうから、細釈に至つて仏徳を讃ずることと釈義をほごにして、所謂分釈と細釈とが異なる釈をしたということが出来る、なに故に慧遠がこの様なことをしたかは理解に苦しむ所であるが、了慧無量壽經鈔はこの説をそのまゝ、取捨しているからして、異訳原本經典と異なつた訓示を大聖が於こす

四 善惡の名称と競み方について（坪井）

に至つたものと考えられる。この四善惡は重善惡とも云われるごとく四十八善惡を重ねて善つた偈文であるから、善惡の意を含めて競むのが最も妥当な競み方と思われる。仏徳を敘述するも、その仏徳のごとくならんと善い競う意をもつて競むべきものと考えるのである。それ以上記偈文中横マル貞を付した所を「説法師子吼せんし」「三界の姓となることを得んし」「通達して照さず」ということなし」と訓ずるのを尋善とするのである。

（浄土学研究室 教授）